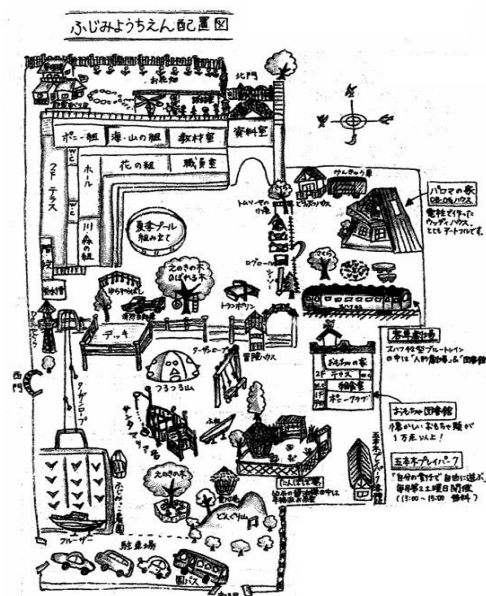


## A-3. 幼稚園のえのき 富士見幼稚園(茨城県結城市)

園庭の隅にすくっと立ち、40年間、当園を見守り続けている「えのき」の大木を、より親しい存在として、子ども達にしらせるためにはどのような方法があるだろうか？

こんもりと豊かな枝と葉、高さ約20メートル、幹の太さが最大で1メートル90センチにまで成長したえのきは、夏には園庭に深い緑陰を提供し、屋外で昼食をとる子ども達のありがたい自然のクーラーとなっている。冬には、大量の枯れ葉を落とし、踏みしめて音や感触を楽しんだり、創作活動やままごとなどに利用したり、最終的には堆肥として畑の食物育成に大いに役立っている。

また子ども達の遊びにも大活躍で、木登りや枝を利用してブランコ、ターザンロープ、はしごなど、いろいろと楽しませてくれる。



### 幼稚園のえのき

えのきと一緒に日々生活している子ども達の関心をもっと高めたいと願い、その一策としてまず「えのきと同じ胴回り探し」を企画した。これは、子どもたちの胴回りを紙テープで測り、それと同じ太さの幹や枝を探して、えのきに巻き付ける遊びである。

小学生も預かりで登園している夏休みの夏季保育の一日。まず子ども達に呼びかけて紙テープで胴回りを測り、それを園庭に並べると、みんな興味を示して集まってきた。

小学5年生のMさんと年長T子のテープが同じ長さとなって、お互いにビックリ！それから二人で同じ太さのえのきにテープを巻き付けた。年齢差5歳、身長差25センチの二人が同じ胴回りということで、一気に親近感が増したようである。T子が「私たちのえのきは、ここよ！」と、2本の白いテープがまきついた幹をみんなに宣伝すると、他の子も「私のも」「私もつける」と次々にえのきにテープが巻きついていった。

同じ太さの幹の位置に手が届く子どもは自分で、ウエストが細くて枝の高いところと一致する子どもの分は、木登りの得意な小学3年生のK君が取り付け役を買って出てくれた。

当園OBの小学生の中にはK君のような木登りチャンピオンが何人かいて、保育者よりもはるかに高いところに到達でき、在園児たちの憧れの的である。園児たちはその憧れにつられ怖いもの知らずである程度の高さまで登ってしまうこともあるが、小学生の場合は、過去に自分でヒヤッとする経験を何度も積み、えのきの状態を体で熟知しているので、登り降りは慎重である。その体験から、在園児の木登りに対して、危険箇所などの確なアドバイスをしてくれる。

このように小学生が保育の中に入ることで活動の幅が広がり、倍以上の体験ができる。また1本のえのきを仲立ちにして、たくさんの気づきを得ることができることを学んだ。

### えのきの1年

ちょっとした導入で子ども達には新たな気づきが広がり、園の仲間として親しみを持って「えのき」を受け入れるようになる。

- \* 10月下旬 落ち葉掃きが教職員の日課となる
- \* 12月初旬 落ち葉がすべて完了する
- \* 4月 新緑の芽が出始める
- \* 4月下旬 若葉が日ごとに増えてくる
- \* 5月中旬 緑色のえのきの実(種)が風とともに落ちてきて、園庭中に散る。

すると、その実を求めて鳥たちが集まってくる。その中に、黄色い落ち葉が数枚混ざっていることに気づく子どももいる。

「どうして秋じゃないのに葉っぱが黄色くなるの？」  
「どうして緑色の実が落ちるの？秋の時は黄色だったよ」

#### <樹木に詳しい人の話>

植物は、いらなくなったものはすぐに自分で切り捨てるんだよ。そうやって自分自身を常に守っているんだ。一度に芽を出すと霜の被害で全滅する恐れもあるので順番に芽を出していくんだよ。一度に実(種)をたくさん落とすのは、次の世代に自分の子孫を少しでもたくさん残すためなんだ。

えのきにありがたかるのは、木についているアブラムシを食べるためなんだよ。木には毛虫もいるよ。それを野鳥が食べに来るんだ。

いつも小鳥が遊んでいる。そこへカラスが来るといっせいに飛び立って逃げるよ。えのきからは樹液も出ているよ。だから木登りをすると、足にゴツゴツ当たって痛んだ。足のかけ方も難しく、だるくなったりするよ。

いつも何気なく見上げているえのきは、四季折々の私たちの生活に様々な楽しみや恵みを与えてくれる大切な友人であることに改めて気がつく。「ウエスト合わせ」から始まった気づきから、えのきの大木はこのようにして園児たちの仲間入りをした。

## えのきとの関わりと子ども達の変化

今まで何気なく見てきた木。一連のえのき遊びを機に、今度は子ども達が自分でいろいろなことに気がついていくのだろう。実際、いろいろなものをよく見るようになった。比較して見るようになった。

- \*木が太くなると強く、折れにくくなる。
- \*小さい枝は折れやすい。
- \*大きい葉っぱ。小さい葉っぱ。
- \*とげのある木。つるつるしている木。

触ったり、疑問を持って試したり…子どもの中に無意識のうちに見比べる習慣がついた。なにかにつけて比較ができる(五感を使って)。目や手で重さを量る。長さを測る(目ばかり、手ばかり)。耳で音の遠近を判断する。鼻で微かな匂いの違いを感じとる。

小学生が園の仲間に入るといろいろな発想が次々とわいてきて行動が広がり、園児たちも一生懸命についていこうとする。今回のえのきの学習でも、大いに力を得られた。混合保育は、教育に幅が出ることを実感した。



## えのきの高さへの驚き(4歳児)

(記録日:平成16年9月28日(火) 場所:園舎2階テラス)

年長児との合同お帰りの会のため、園舎2階の年長組保育室へ上がった年中児のR。テラスからじっと、えのきを見て「この木はとっても大きくて、ぼくが木登りで登っているのはまだ木のおそこまでだったんだね」とポツリ言った。

今年の夏休みの預かり保育で、Rと連日のように顔を合わせていた小学3年生のKが、えのき登り名人でいつも高いところまで登って悠然と見下ろしている姿を、Rは間近でずっと見ていた。そうした日々の積み重ねの中で、Kへの憧れや挑戦の気持ちがRの中でどんどん高まったと思われる。最近のRは、天気さえよければほとんど毎日、えのきに登っていた。

本人はいつも大冒険をしてえのきのてっぺん近くまで登っているつもりだったが、2階という新たな高さからの視点から改めて客観的にえのきをよく見てみると、自分がまだ全高の3分の1ほどしか到達していないことを実感したようだ。

子どもは、日常生活の何気ない場面で、疑問や不思議に思ったことを心ゆくまで自分で試し、体験しながら感じ、分かるという一連の行程を常に繰り返しながら、理科や科学を自然に学んでいる。そして、そこから体得したつづやきを、大人には聞こえない子どものポケットにそっとしまいこんでいることが、Rの言葉からよく分かった。

帰りの会で、一人抜け出してテラスにたたずんでいたR。保育者は一瞬、「R君のいつものちょっとした困った行動がまた始まった!」と決めつけてしまいそうになったが、無口で感情表現の不得意なRの「ぼくは、まだあそこまでしか登っていないんだ」という小さなつづやきが耳にとまったことで、その思いが伝わってきて「早まって注意をしなくて、本当によかった」と胸をなで下ろした。同時に、Rの発見と新たに始まるであろうえのきへの挑戦にエールを送りたい気持ちでいっぱいになった。

## 科学を見いだす保育とは? 年中組担任から

日々の園生活の中から発せられる子ども達の「どうして?」という声をキャッチする保育者の聞く耳、聞ける耳を養うことは、子ども達を科学の世界に誘う第一歩だと思う。その聞く耳を持つためには、園の環境や教育方針、保育者自身のたゆまぬ努力が大きく関わっていると思われる。自然環境の豊かな当園で、毎日存分に遊びこんでいる子ども達からは「なぜ?」「どうして?」の疑問が次々にわき出てくる。そうして、それに答えたり共感したり、一緒に調べあったりする友達や先生がいる。そのことが、未知の世界への扉を開ける楽しさをより一層広げ、探求心をも育てるのだと思う。

## 「科学する心」に着目した保育を実践して見えてきたこと

「科学」は、子ども達にたくさんの不思議や夢、あこがれを育ててくれたと言える。そして、子ども達以上に顕著な変化が見られたのは実は保育者である。子ども達とともに、身の回りの事象に対する「科学」のアンテナを研ぎ澄ます体験を積むうちに、感覚が鋭敏になると同時に園の教職員が一丸となって研究に取り組む醍醐味や力強さを全員で感じる事ができた。今年度の取り組みを通じて、私達の身の回りは、気がつけば無限の科学で満ちていることが分かった。広く深く物事を見つめ、新しい世界の扉が開いていく楽しさや素晴らしさを、ぜひとも多くの人々に味わって欲しいと思う。

## ポイント

一年を通してじっくりと園庭のえのきに子どもたちがかわかり、様々なことを自分で実感しています。そして、その子どもたちの実感に寄り添っている保育者の様子がわかります。日々かわっているからこそ、自分が登っていたえのきの位置が客観的に見えたとき、えのき全体から考えるとまだ低かったという子どもの気づきがうまれるのでしょう。